子どもの生活といじめ・不登校等に関する意識調査

平成２６年３月

ひょうごユースケアネット推進会議

はじめに

ひょうごユースケアネット推進会議は、平成９年に、青少年の心の問題への取り組みを総合的に進めるために、教育、育成、福祉、保健、医療、行政など１７機関からなる「兵庫県青少年の心の問題ネットワーク推進会議」という名称で開設されました。

その後平成１４年に名称を「ひょうごユースケアネット推進会議」と改め、構成機関も２８機関となり、これまでそれぞれの時代で、課題となっている青少年問題をテーマに据えて、調査、研究、実践、啓蒙などを精力的にすすめて参りました。とりわけ非行問題、いじめ問題、不登校問題、ひきこもり問題などは、重要なテーマとして取り組んできました。

この間こうした活動の成果を、その都度冊子に編集して、関係機関はもちろんのこと、県民に向けて研究成果を公表し、発表してきたところです。

本年度も、青少年問題としてはなお大きな課題である、子どもの生活、いじめ、不登校の問題を中心のテーマに据えて、調査研究をして参りました。特に今回の調査研究は、現在の子どもの様々な問題が、子どもの生活の在り方や家族との関わりなどを視野にいれて捉える必要がある、という観点を重視し、調査項目をつくり上げました。したがってややグローバルに見える調査研究ではありますが、関係機関のご協力をいただいて、ようやくここに調査研究をまとめることができました。

本調査研究は、本ユースケアネットの事業として行われましたので、ユースケアネットの構成機関の中から、座長を含め５名でワーキングチームを構成し、本調査項目の決定や分析・編集作業を進めました。

本冊子が教育、子育て、育成など様々な方面でお役に立つならば、本研究に関わったものとして、これに過ぎる喜びはありません。

以上、本研究冊子発行のご挨拶といたします。

平成２６年３月

ひょうごユースケアネット推進会議
座　長　　小林　剛
（兵庫県立神出学園長）

目　　次

子どもの生活といじめ・不登校等に関する意識調査

はじめに

目　次

Ⅰ．調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ．調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

　1．家庭・家族と子どもの意識・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

　2．高い子どものストレス状況・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

　3．学校生活と子どもの意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

　4．いじめ問題に関する子どもの意識・・・・・・・・・・・・・・１３

　5．子どもにとってのストレスの背景・・・・・・・・・・・・・・２２

Ⅲ．本調査のまとめと提言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

Ⅳ．引用参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８

Ⅴ．調査票・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９

Ⅵ．編集・執筆等関係者名・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１

Ⅰ．調査の概要

１．調査の目的

本調査は情報化が進み、都市化による環境の変化がますます進行する中で、子ども達の生活の変化や、それに関わる子ども達の意識はどのようになっているかを、①家庭・家族と子どもという観点、②現代社会に生きる子ども達のストレスの現状はどうなっているのかという観点、③子ども達の日々通う学校と子ども達の関係はどのようになっているのかという観点、④子どもの世界では大きな問題になっている、いじめ問題に関する子どもの意識はどうなっているのかという観点

以上の４点を中心に、子ども達の現状と意識を把握することを調査の主な目的として、企画された。

２．調査の対象

今から１３年前に、本「ひょうごユースケアネット推進会議」の前身である「兵庫県青少年の心の問題ネットワーク推進会議」が子ども達に意識調査（「子どものストレス―その実態と対処―」（以下「平成１２年調査」という。）を行ったのであるが、この時の調査結果と今回の調査との比較も、今回の調査の大きな課題であったので、調査対象の子ども達もこれに見合って小学生と中学生とした。

調査対象は、以下の地域と、以下の子ども達である。

① 人口密度や都市化の度合いなどを考慮して、都市部、中間部、農村部の三つの地域を調査対象として選定した。この学校の選定に当たっては、兵庫県小学校長会及び兵庫県中学校長会のご協力をいただいた。

② 調査対象の子どもの学年は、平成１２年調査に合わせて、小学校５年生と中学校２年生とした

③ 調査人数は、小学生、中学生それぞれ３００名ほどとし、合計６００名以上のデータを回収することを目標に、それぞれの地域の学校に依頼をした。

３．調査実施時期

平成２５年９月～１０月

４．回収された有効回収データ数は以下の通りである。

小学校５年生　　３５１名

中学校２年生　　３５６名

合計有効回収数　　７０７名

Ⅱ．調査の結果

１．家庭・家族と子どもの意識

① 子どもと家族のコミュニケーション

＜小学生＞

子ども達の成長や発達にとって、そのベースとなる場は家庭である。その中でも、家族とのコミュニケーションは極めて大切なものである。その意味でまず家族とのコミュニケーションを捉えてみた。「普段家の人とよく話しますか」という家庭内のコミュニケーションについては、表１に示すように、「よく話す・時々話す」については、総じて小学生の家族とのコミュニケーションは活発であった。

＜中学生＞

中学生においても、小学生とほぼ同様で、地区を問わず、家族とのコミュニケーションは活発といってよい。思春期はややもすると、家庭内コミュニケーションは低下するのが普通であるが、本調査においてはその傾向はあまり見られなかった。むしろよく話す中学生の姿がはっきりと示された。

表1　　普段家の人とよく話しますか（%）

		都市部	中間部	農村部
小学生	よく話す・時々話す	97	96	98
	あまり話さない・ほとんど話さない	3	4	2
中学生	よく話す・時々話す	93	94	97
	あまり話さない・ほとんど話さない	6	6	3

② 親や家族は子どもを理解してくれているか

＜小学生＞

親と子の関係で、子どもがよく問題にするのは、「親や大人は子どものことを分かってくれない」ということである。この点に注目して問いかけてみた。

「親や家族は子どもを理解してくれているか」について、小学生は「よく分かってくれている」は都市部が５４％、中間部６０％、農村部が６２％程で、子ども理解の度合いは都市部よりも中間部、農村部がやや高いようである。しかし表２に示すように、各地区とも１０％ほどの小学生は「あまりわかってくれていない」「ほとんどわかってくれていない」と答えていて、これは少し気になる数字である。

この質問との関連で、「家の人はあなたの話をよく聞いてくれますか」という問いをしたところ「よく聞いてくれる」「まあ聞いてくれる」合わせて各地区とも９０％以上となっていて、家族は予想以上に子どもの話を聞いてくれているようだ。

これと同じ内容で平成１２年調査では、小学生の２３．３％が「話を聞いてくれ

ない」と応答している。それに比べると今回の調査での小学生の回答は、家族間のコミュニケーションについては、大きな改善が見られた。

＜中学生＞

中学生においては、思春期ということもあってか、小学生に比べて「よくわかってくれている」が各地域とも、２８％～３６％でかなり低い。思春期は親からの自立ということもあって、親子関係にこうしたズレが出るのも不思議ではない。しかし「まあわかってくれている」を加えると各地区とも８０％前後は「分かってくれている」ということになり、中学生に対する親や家族の理解はかなりあるとみてよいであろう。ただし、表２に示すように、１６％～２５％の中学生が「あまりわかってくれていない」か「ほとんどわかってくれていない」と答えていて、こうした中学生の親子関係が、親子のさまざまな葛藤の元になりかねないという点で心配な数字である。

この質問との関連で「家の人はあなたの話をよく聞いてくれますか」について質問したところ、中学生は「よく聞いてくれる」が５０％～５９％となっている。「まあ聞いてくれる」は３４％から４０％となっていて、これを合わせれば、どの地区も９０％程の中学生が「話を聞いてくれている」と答えていることになり、「話を聞いてくれない」は１０％弱ということであった。したがって中学生の家族とのコミュニケーションは、予想以上に良好であると見てよいのではないか。

この点に関して平成１２年調査を見ると、「家の人が話を聞いてくれない」は中学生全体の５３．５％となっていて、今回の調査と比べて極めて大きな差となっている。したがって今回の調査から言えることは、家族が中学生の話をよく聞くようになった、という意味で大きく改善したと捉えていいのではないか。

表2　　家の人はあなたのことをわかってくれていますか(%)

		都市部	中間部	農村部
小学生	あまりわかってくれていない	6	7	6
	ほとんどわかってくれていない	3	5	3
中学生	あまりわかってくれていない	13	20	14
	ほとんどわかってくれていない	3	5	7

③　これまで家族に大事に育てられてきたか

親や家族に大切に育てられてきたかということは、子ども達のその後の心身の成長にとって極めて重要なことである。この点については、以下の結果が得られた。

＜小学生＞

「あなたはこれまで家の人に大事に育てられたと思いますか」という問いに対して、図１を見ると、地域による違いはほとんどないが、「とても大事に育ててくれた」は８０％前後で、「まあ大事に育ててくれた」を合わせると、ほぼ１００％近い小学

生が、大切に育てられたと回答していて、育ちの安定さを示している。平成１２年調査においても、親に愛されて育った小・中学生の育ちは安定しているということが指摘されている。

図1　　これまで家の人に大事に育てられたか(%)

小学生	都市部	中間部	農村部
とても大事に育ててくれた	83	78	82
まあ大事に育ててくれた	16	18	17
その他	1	4	1

＜中学生＞

中学生については図２において、「とても大事に育ててくれた」が、中間部で若干高く６７％、都市部、農村部が６０％となっている。この点は小学生よりも２０％程低いが、「まあ大事に育ててくれた」を加えると９０％を超し、小学生・中学生で大きな違いは見られず、中学生も安定して育っているといってよいのではないか。

ただ、中学生の場合は、小学生と違って親から自立に向かう思春期という時期で、親や家族を見る見方が厳しくなるという時期でもあり、そうした点から「とても大事に育てられた」と「まあ大事に育てられた」に２０％程の差が出てはいるが、気になるほどの数値ではないとも思われる。

図2　　これまで家の人に大事に育てられたか(%)

中学生	都市部	中間部	農村部
とても大事に育ててくれた	60	67	62
まあ大事に育ててくれた	36	31	34
その他	4	2	4

また、「その他」の中の「あまり大事に育ててくれなかった」または「ほとんど大事に育ててくれなかった」と答えた小学生、中学生が４％程度いるが、こうした子ども達もいるということに注目しておく必要があろう。

平成１１年３月に、兵庫県「青少年の心の問題」ネットワーク推進会議がおこな

った調査「いじめ問題の解決や予防をめざして」においては、父親、母親との関係の在り方が、子どもの育ちを決定づけるという指摘をしている。

同様に平成１２年調査においても、子どもは「大事に育ててくれなかった」と思っているのに父親は「大事に育てた」と思っている、このズレのある親子の場合は、子どものストレスが有意に高かった。同様で、母親は「大事に育てた」と思っていても、子どもが「大事に育てられなかった」と思っている親子においても、子どものストレスは有意に高いという結果が報告された。

④「いま」家族に大事に育てられているか

＜小学生＞

「いま」という限定で前問と同じ質問をしたところ、小学生については「とても大事に育ててくれている」については、都市部、農村部が７６％であるのに比べて中間部が６４％で、１２％ほど中間部が低くなっている。「まあ大事に育てられている」を加えると、前問の結果とそれほどの違いはない。ただし「あまり大事に育ててくれていない」については、中間部が６％、都市部、農村部が３％となっていて、数字としては少ないながら、こうした育ちの小学生がいることに注目しておきたい。

＜中学生＞

「いま」という前提で、中学生についてはどうか。前問の「これまで」と比較して、「いま、とても大事に育てられている」については、どの地区も６０％程で、小学生よりも１０％程低い数値になっている。この数値は、中学生としての発達から考えて、現実をリアルに見つめたことから出てきた数値なのかもしれない。ここでも気になるのは、「あまり大事に育ててくれていない」「ほとんど大事に育ててくれていない」が５％弱いることである。これまでの多くの非行臨床研究の知見によれば、親に愛されなかった子ども達の多くが思春期段階でさまざまな問題を起こしていることが報告されてきている。

２．高い子どものストレス状況

ストレスを測定するために、６項目のストレス反応を捉える質問を設定し、子ども達のストレス状況を捉えたところ、以下のような実態が浮かび上がった。

＜小学生＞

表３によると、６項目の内「よくある」「時々ある」の総計で６０％を超す項目を上げてみると、中間部が「イライラする」８０％、「不機嫌で怒りっぽくなる」が８０％、「体がだるくなる」が７２％、「疲れやすくなる」が６７％、「怒りをぶつけたくなる」が６２％となっていて、小学生の中では中間部が比較的ストレス反応が高い状態にあることが分かった。

ストレスはもともとその時の心の状態をあらわすもので、時間と場によって違いが出るものである。

表3　　ストレス反応が「よくある」「時々ある」(%)　　小学生

今回(平成25年)	都市部	中間部	農村部	平成12年
イライラする	72	80	79	56
不機嫌で怒りっぽくなる	69	80	69	45
体がだるくなる	67	72	65	50
疲れやすくなる	73	67	67	46
やる気がしない	57	49	46	41
怒りをぶつけたくなる	56	62	58	35

農村部においては「イライラする」が７９％、「不機嫌で怒りっぽくなる」が６９％、「疲れやすくなる」が６７％、「だるくなる」が６５％となっている。都市部の小学生については、「疲れやすくなる」が７３％、「イライラする」が７２％、「不機嫌で怒りっぽくなる」が６９％、「体がだるくなる」が６７％となっている。

ストレスが象徴的に表れる項目は「イライラ」「怒りっぽさ」「疲れ」「だるさ」であるが、小学生においてもかなり高いストレス状況にあることが分かった。

表３の、平成１２年に行われた同様の調査結果を比較してみると、今回の数値との間に歴然とした違いがあることが分かる。すなわちストレス反応のどの項目においても、今回の小学生のストレスが極めて高い状態にあることが分かる。

＜中学生＞

次は中学生のストレス状況についてである。表４を見ると、ストレスが高い地域は中学生においても中間部となっている。「イライラする」は８６％、「不機嫌で怒りっぽくなる」が７６％、「体がだるくなる」が７６％、「疲れやすくなる」が７５％、「やる気がしない」は６２％となっていて、相当高いストレス状態であることが分かる。

都市部では、「イライラする」が８０％、「だるくなる」が７７％、「不機嫌で怒りっぽくなる」が７２％、「やる気がしない」が７０％、「疲れやすくなる」が６５％となっていて、ここでも高いストレス状態になっている。

農村部については、「イライラする」が８３％、「不機嫌で怒りっぽくなる」が７４％、「だるくなる」が７３％、「疲れやすくなる」が７０％であり、農村部でもそれなりにストレスは高い状態にあることが分かる。

表4　　ストレス反応が「よくある」「時々ある」(%)　　中学生

今回(平成25年)	都市部	中間部	農村部	平成12年
イライラする	80	86	83	70
不機嫌で怒りっぽくなる	72	76	74	57
体がだるくなる	77	76	73	72
疲れやすくなる	65	75	70	65
やる気がしない	70	62	63	67
怒りをぶつけたくなる	52	51	51	52

また表４に、比較のための平成１２年調査の中学生分のストレス調査の結果を比

較したところ、小学生と同様に今回調査の中学生のストレス状態も、平成１２年度調査よりも、歴然とした違いがあり、中学生も小学生と同様、極めて高いストレスを抱えた状態にあることが判明した。

子どものストレスはさまざまな日々の生活の中から発生するもので、子どもによって、その背景はさまざまである。家族、とりわけ親との関わり、友達との関係、学校での学習や生活など、個人によって違うので、とらえ難い面が多い。

＜高いストレス反応を示した子どもの共通の特徴＞

本調査のなかで、ストレス反応が象徴的にみられる三つの項目「イライラすることがありますか」「不機嫌で怒りっぽくなることがありますか」「怒りをぶつけたくなることがありますか」に限って、「よくある」「ときどきある」と応答した子どもが、他の問いでどのような回答を示しているかを検証したところ、以下いくつかの共通の特徴を見出だすことができた。

―小学生―

三つのストレス反応が「よくある・ときどきある」と回答した小学生のうち、

①４５．６％が「登校することが楽しくない」と回答

②５０．２％が「学校にあまり行きたくない・ぜんぜん行きたくない」と回答

③５１．０％が「学校での勉強が楽しくない」と回答

こうしてみると高いストレスを抱えている子ども達が、学校への適応に困難を抱えている子どもであることが明らかになった。

―中学生―

中学生に対しても同様の方法で分析をしたところ、小学生よりも多くの共通の特徴が見えてきた。

三つのストレス反応が「よくある」「ときどきある」と回答した中学生のうち

① ３７．３％が「家族にわかってもらえていない」と回答

② ３５．２％が「登校することが楽しくない」と回答

③ ４２．９％が「学校に行きたくない」と回答

④ ６３．３％が「勉強がうまくいっていない」と回答

⑤ ６６．３％が「学校での勉強が楽しくない」と回答

このようにストレスの高い中学生は、小学生以上に家庭や学校への適応に苦労している様子がうかがえる。ただこのストレスの問題は逆の考え方もできる。それは、ストレスが高いから家庭や学校への適応が難しいのか、それとも逆に学校や家庭への適応が難しいからストレスが高くなったのか、それはこの限りでは分からない。ただこれまでの研究では、ストレスが不登校の大きな背景になっていることは明らかにされてきている。いずれにしても家庭も学校もストレスを軽減するための努力が求められている。

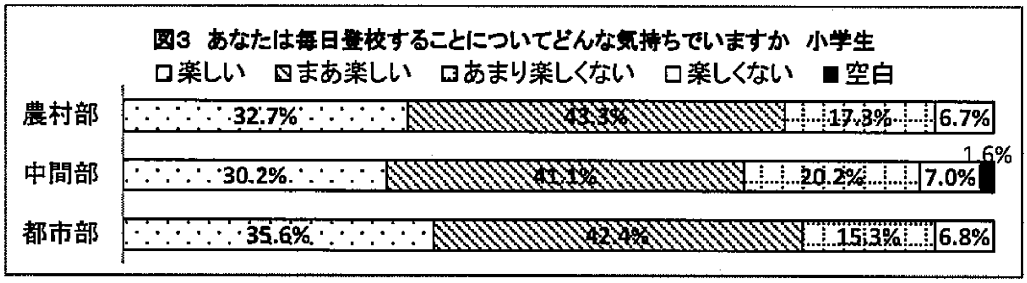
３．学校生活と子どもの意識

①　登校に関する子どもの思い

学校に日々登校することに関する子ども達の思いはどういうものであろうか。学校へ行くことを渋ったり、登校そのものを嫌ったりする子ども達が少なくない中で、素直に子どもはどういう気持ちを持って登校しているかを探ろうとして「どんな気持で登校しているか」という質問をしてみた。

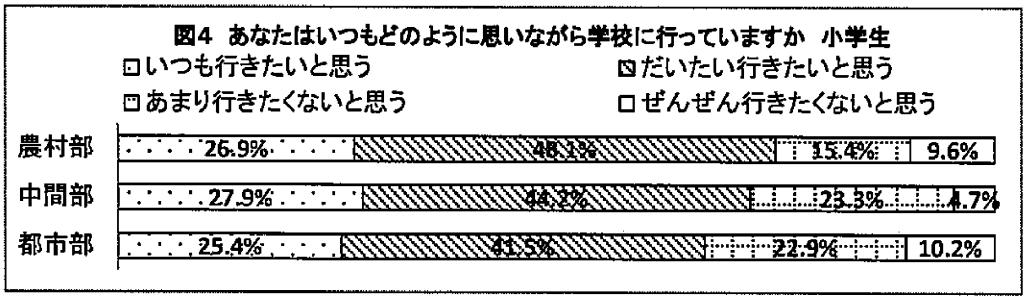
＜小学生＞

図３によると、小学生については、毎日登校することについて、「楽しい」「まあ楽しい」を合わせると、中間部がやや低く７１％であるが、都市部、農村部は７７％となっている。ここで見過ごしてはならないのは、「あまり楽しくない」「楽しくない」の合計が中間部で２７％、農村部で２４％、都市部で２２％存在するという点である。



この質問を別の角度から再確認しようとした質問が、図４の「いつもどのように思いながら学校に行っていますか」の問いである。「いつも行きたいと思う」「だいたい行きたいと思う」を合わせたものが、農村部で７５％、中間部で７２％、都市部で６７％となっている。この数字は前問の「楽しい」「まあ楽しい」の数値とほぼ対応している。

学校に登校して学習することが、「遊び」などと違って、「楽しい」か、と聞かれれば、「楽しい」といえるほどのものではないのかもしれない。その意味では、今回の調査結果は、それほど気にするものではないのかもしれない。しかし図４から分かるように「ぜんぜん行きたくない」が１０％前後いることは、やはり大いに気になる。



ところが「あまり行きたくない」と「ぜんぜん行きたくない」を合わせた数値を見ると、都市部が高く３３％、中間部が２８％、農村部が２５％となっていて、中間部と農村部は前問の「あまり楽しくない」「楽しくない」の数値とほとんど同じで対応していることが分かる。同じ質問を平成１２年調査から見ると、「あまり行きたくない」と「ぜんぜん行きたくない」の合計は３２．８％で、今回の調査の各地区の平均の２８．９％に比較すると、学校に行きたくない子ども達は減少して４％ほど改善されていることが分かった。喜ばしい傾向である。

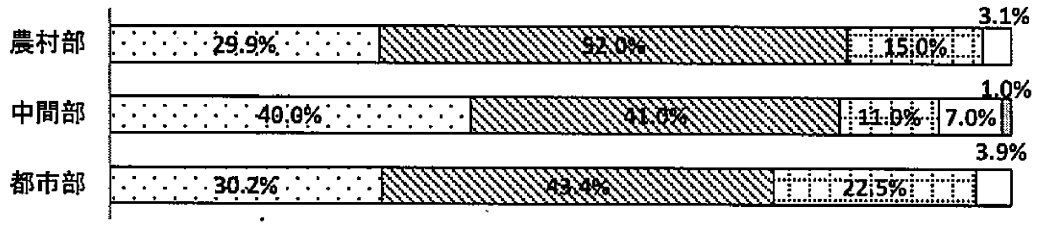
それでも今回の調査を見ると、全体のほぼ四分の一近い子どもが学校への登校意欲が低い状態にあることが分かる。この点は注目しておく必要がある。特に「ぜんぜん行きたくない」子どもについて見ると、農村部、都市部がそれぞれ１０％、中間部が５％いることは、もしかしたらこうした子どもは不登校予備軍の可能性があるのかもしれない。注目しておく必要があろう。

本調査で得られた、学校に「行きたくない」「ぜんぜん行きたくない」と回答した小学生９４人について、こうした小学生達のストレス反応の状態を調べたところ６２．７％が「イライラする」が「よくある」「ときどきある」と回答している。また５６．３％が「不機嫌で怒りっぽくなる」ことが「よくある」「ときどきある」と回答し、さらに５５．３％が「疲れやすくなる」ことが「よくある」「ときどきある」と回答している。そしてもう一つ４３．６％が「怒りをぶつけたくなる」ことが「よくある」「ときどきある」と回答している。こうして見ると不登校気分の背景にストレスの問題が関わっていることが明らかである。

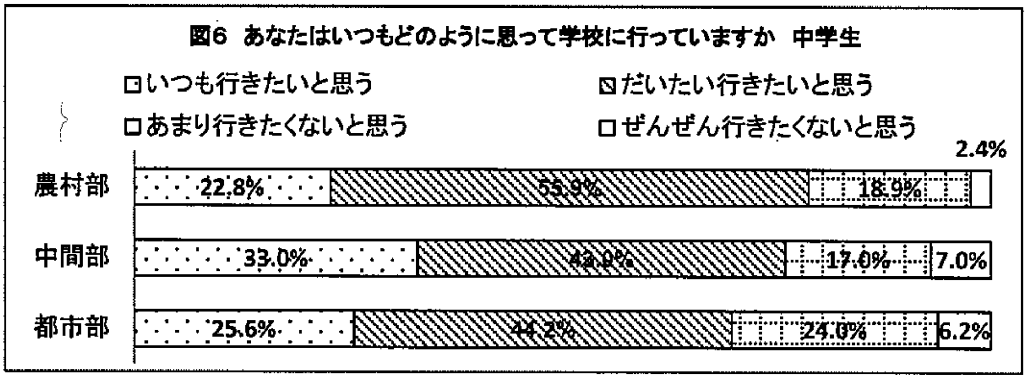
＜中学生＞

中学生については図５に示すように毎日登校することについては「楽しい」が中間部の中学生が４０％、都市部、農村部が３０％となっている。これに、「まあ楽しい」を合わせると、都市部が７３％、農村部、中間部はそれぞれ８２％、８１％となっている。今日の中学生の意識からすれば、こうしたデータは学校適応という点から考えると、なかなか適応的であると評価してよい数字のようにも思われる。

図5 あなたは毎日登校することについてどんな気持ちでいますか 中学生



問題なのは「あまり楽しくない」「楽しくない」の回答である。これを合わせた数字は、都市部が２６％、農村部、中間部はそれぞれ１８％となっていて、２割前後の中学生が、登校することを「楽しくない」としている。この数字の裏に何があるかは、このかぎりでは分からないが、こうした中学生がいることに注目しておく必要があろう。



では「いつもどのように思いながら学校に行っていますか」について図６の中学生の回答をみると、「いつも行きたい」「だいたい行きたい」は農村部が７９％、中間部が７６％、都市部が７０％となっている。ところが「あまり行きたくない」「ぜんぜん行きたくない」については、都市部は３０％、中間部が２４％、農村部が２１％となっていて、都市部中学生を筆頭に登校意欲の低い子どもがかなりいることが分かる。これを平成１２年調査と比較すると、「あまり行きたくない」「ぜんぜん行きたくない」の合計が４１．９％となっていて、かなりの中学生が、登校意欲が低かった。その点今回の調査の結果は地区を平均しても「あまり行きたくない」「ぜんぜん行きたくない」は２５．０％で、大きな改善が見られる。しかしそれにしても２割から３割近い中学生が「学校に行きたくない」という登校意欲の低い状態にあることは、その背景に何があるかを検討してみる必要があろう。

そこで中学生においても小学生と同様、「学校に行きたくない」と回答している中学生９５人について、ストレス反応を調べてみた。その結果「イライラがよくある」は６３．１％、「不機嫌で怒りっぽくなる」６３．１％、「疲れやすい」６０．０％、「やる気がしない」５８．４％、「怒りを他人にぶつけたい」３４．７％となっていて、明らかに不登校気分の中学生に、高いストレス状況が存在することが分かった。

こうした中学生達が不登校予備軍になる可能性があるように思われる。注目しておく必要があろう。

②学校生活への適応状態について

学校生活への適応を以下三つの観点から把握しようと考えて、調査を行った。「友達との関係」「先生との関係」「学習活動への適応」の三点は、以下の結果である。

＜小学生＞

まず、表５の小学生の友達との関係から見てみることにする。小学生の友達関係については、地域を問わず概ね９０％の子ども達が「うまくいっている」「だいたいうまくいっている」と回答している。「あまりうまくいっていない」「うまくいっていない」については中間部が１０％となっているが、農村部、都市部はいずれも５％ほどで、仲間関係の適応はよいとみてよい。いじめ問題もあって、小学校の高学年は友達関係が難しい局面も多い中で、本調査による小学生の友達関係は適応的であることが明らかになった。

表5　　学校への適応状態(%)　小学生

		都市部	中間部	農村部
友達との関係	うまく・だいたいうまくいっている	95.7	89.2	96.2
	あまり・ほとんどうまくいっていない	4.2	10.1	3.8
先生との関係	うまく・だいたいうまくいっている	83.9	78.3	80.8
	あまり・ほとんどうまくいっていない	15.3	21.7	19.2
学校での勉強	うまく・だいたいうまくいっている	82.2	79.8	83.7
	あまり・ほとんどうまくいっていない	17.0	20.1	17.0

次は同じく表５の小学生の「先生との関係」である。先生との関係が「うまくいっている」が３１％から３４％で、「だいたいうまくいっている」を加えると８０％前後となり、「友達との関係」の数値に比べると１０％ほど低いが、先生との関係もまあまあといってよい。しかし先生との関係が「うまくいっていない」小学生が「中間部」「農村部」でそれぞれ２０％近くいることは、無視できない数字であろう。

次に、もう一つ小学生の「学習への適応」はどうであろうか。表５によると、「学校での勉強がうまくいっているか」という問いに対して「うまくいっている」については、都市部が高く４１％であるのに、中間部、農村部ではそれぞれ２７％、２６％と低い。しかし「だいたいうまくいっている」を加えると都市部８３％、中間部８０％、農村部８４％となっていて、学習への適応は概ね良好である。ただし「うまくいっていない」子どもは各地区とも１６％から２０％ほど存在することは無視できない数字であろう。

この質問を別の角度から再確認しようとした質問として「勉強することが楽しいですか」という問いがある。これに対して「楽しい」は、どの地域もほぼ同数で２０％程になっている。「まあ楽しい」は農村部が５２％であるが、都市部、中間部は４６％、４３％となっていて合わせて農村部７２％、都市部６６％、中間部６２％になる。こうしてみると、全体の三分の一は「あまり楽しくない」「楽しくない」であって、こうした子ども達に学ぶ楽しさをどうつくっていくかが課題である。

＜中学生＞

次は中学生の学校生活への適応状態について、小学生と同じく「友達関係」「先生との関係」「学習への適応」について見ていくことにしたい。

まず表６の「友達との関係」であるが、「うまく・だいたいうまくいっている」は

各地区とも９５％前後で、友達関係は良好で、安定している。「うまくいっていない」は５％以下である。

次は表６の「先生との関係」であるが「うまく・だいたいうまくいっている」は都市部８６．６％、中間部９０．０％、農村部８６．６％となっていて、中学生においても先生との関係は良好であるといってよいであろう。しかし各地区とも１０％以上の中学生が「うまくいっていない」と回答していて気になる。

表6　　学校への適応状態(%)　中学生

		都市部	中間部	農村部
友達との関係	うまく・だいたいうまくいっている	95.3	96.0	94.5
	あまり・ほとんどうまくいっていない	4.7	3.0	5.5
先生との関係	うまく・だいたいうまくいっている	83.8	90.0	86.6
	あまり・ほとんどうまくいっていない	14.8	10.0	12.6
学校での勉強	うまく・だいたいうまくいっている	52.7	69.0	59.1
	あまり・ほとんどうまくいっていない	47.3	31.0	40.1

では中学生の学習への適応について表６から見てみよう。学習が「うまくいっている」は極めて低く、都市部９％、中間部、農村部はそれぞれ１３％となっている。これに「だいたいうまくいっている」を加えても、小学生に比べて低く、中間部が６９％、農村部が５９％、都市部が５２％となっている。こうしてみるとおよそ半数の中学生は、勉強がうまくいっていないと自己評価していることになる。いうまでもなく中学校は学習内容の高度化と学習の量的増加などで学習に困難が多いこともあって、これが影響しているであろう。それにしても「あまりうまくいっていない」「うまくいっていない」は都市部において４７％、農村部４１％、中間部３１％で、中学校での学習指導の重要さが改めて課題になる。

この質問を別の角度から再確認しようと考え「勉強することが楽しいですか」という質問をしたところ、「楽しい」が地区で多少の違いはあるが８％～１１％で低く、「まあ楽しい」を加えても都市部、中間部は５０％に満たない。農村部でかろうじて５１％となっている。この結果は前問の「学習がうまくいっていない」とほぼ対応している。「学習が分からない」「うまくいかない」などの中学生達の学校生活は最大の不安定要因であり、中学校教育の大きな課題といってよい。

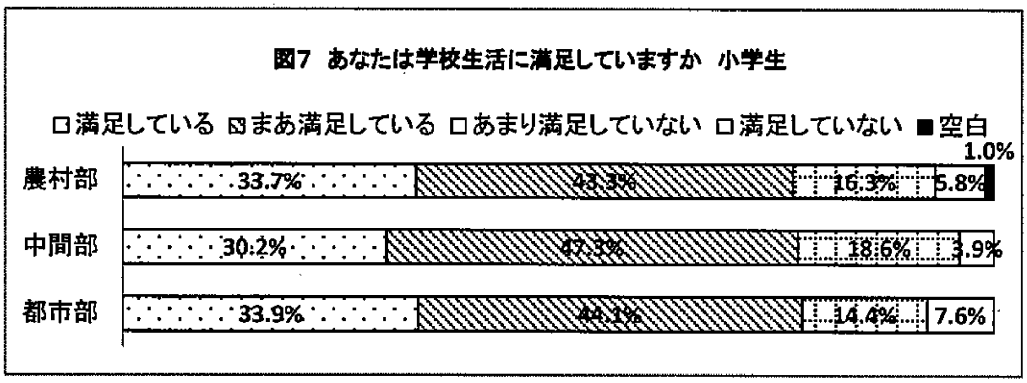
② 学校生活の満足度

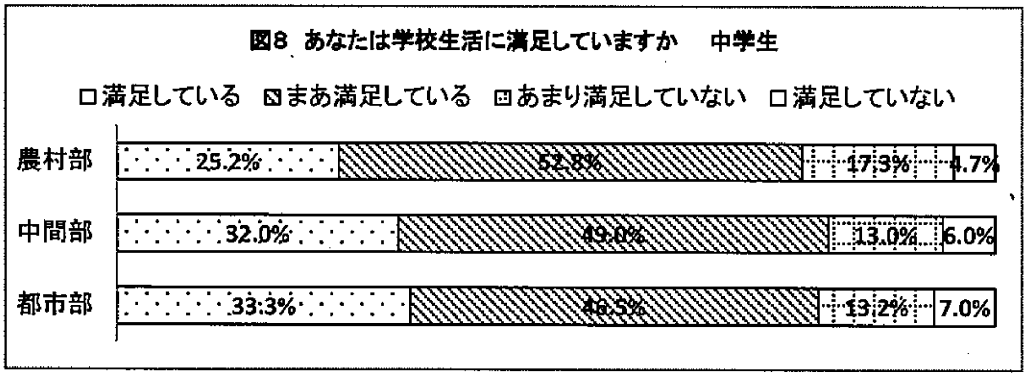
子ども達は１日の大部分の時間を過ごしている学校生活についてどのような意識で生活しているのであろうか。この点についてトータルに学校生活の満足度を聞くことにした。

＜小学生＞

図７を見ると、それぞれの地区でほとんど差はなくて「満足している」が３０％～３４％、「まあ満足している」も４３％～４７％となっていて、合わせて８０％弱の小学生が満足圏に入っている。問題は各地区とも２０％弱の小学生が「あまり満

足していない」と回答している。事情は様々であろうが気になる数字である。





＜中学生＞

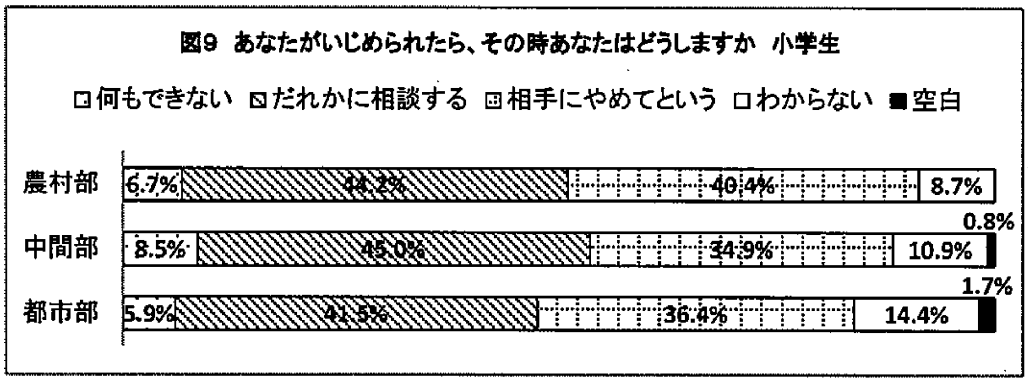
中学生についても図８で「満足している」が都市部、中間部が３３％程であるが、農村部では２５％と低い。「まあ満足している」を含めると地区による相違は殆どなく、８０％弱が満足圏に入る。ただここでも２０％前後の中学生が満足していない。この背景は分からないが、個別の様々な事情があるのであろう。この質問の限りでは分からない。しかし全体としておよそ８０％の中学生が満足の圏内にいるわけで、この結果は大いに評価してよいのではないか。

４．いじめ問題に関する子どもの意識

① いじめられたらどう対処するか

＜小学生＞

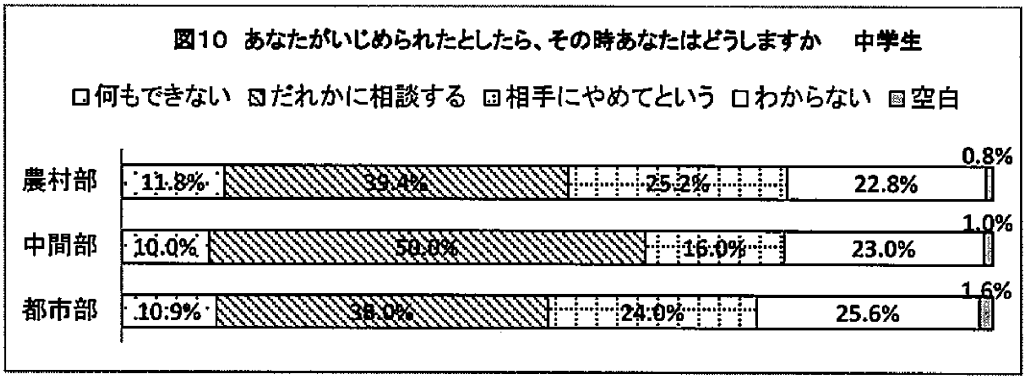
「あなたがいじめられたとしたら、その時あなたはどうしますか」という問に対して、図９の小学生の回答を見ると、「誰かに相談する」が都市部４２％、中間部４５％、農村部４４％となっている。「相手にやめてという」については、農村部４０％、中間部３５％、都市部３６％となっている。



この回答を見ると、およそ４１％～４５％の子どもが「だれかに相談する」と答え、３４％～４０％の子どもが「相手にやめてという」となっている。「だれかに相談する」にしても「やめてという」にしても、いじめに立ち向かう意志をもった子どもであるが、問題なのは「何もできない」が６～８％程いるという事実である。この子ども達は、いじめられても自分でじっと我慢するという子ども達であって、こうした子ども達が、より深刻ないじめの標的にされる可能性の高い子ども達なのである。これまで起こった多くのいじめ自殺などに追い込まれた子ども達は、こうした何もできない子ども達であることが分かっている。何よりもこうした子どもがいるということを、周りの大人が常に頭に入れて、家庭でも、学級でも子どもを深く観察することが必要であろう。

＜中学生＞

この点に関する中学生の回答は図１０に示している。「あなたがいじめられたとしたら、その時あなたはどうしますか」という問いに対して、中学生の回答は「誰かに相談する」では、中間部が５０％、農村部が３９％、都市部が３８％となった。「相手にやめてという」については、農村部２５％、都市部が２４％、中間部は低くて１６％となっている。



この図から感じることは、全体として中学生が、小学生よりもいじめ抑止のための行動を起こすことに慎重になっている傾向が見えることである。思春期という時期は心の葛藤やいじめの深刻さなどに神経質になる、独特な心性が働く時期でもあり、いじめ問題への対処にはかなり慎重になっている様子が見え隠れしている。と

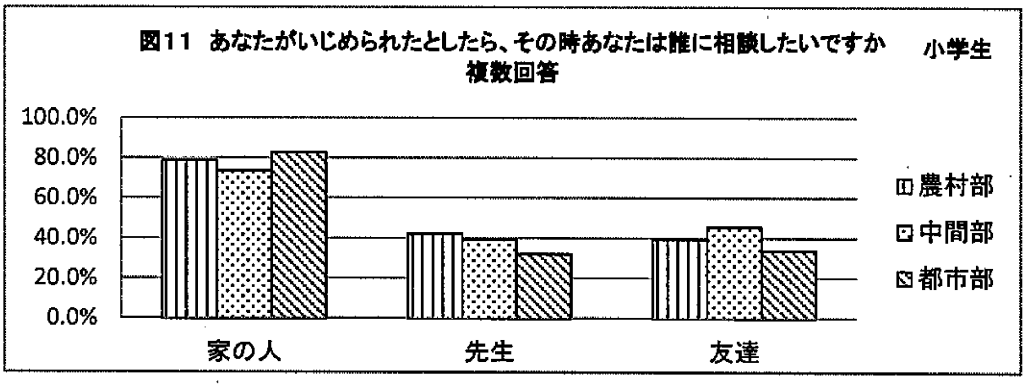
りわけ「相手にやめてという」については小学生の半数になっていて、こうしたいじめ抑止の行動をとることの難しさを彼らはよく知っていて、行動に起こすことを躊躇して、こうした数字になっているのではないかと思われる。「何もできない」については、どの地区も小学生の２倍の１０％程の中学生がいるが、この中学生こそいじめの標的になりかねない子ども達なのである。こうした中学生を早く見つけ、しっかりと寄り添うことが何よりも大切であろう。

② いじめられた時の相談相手は誰

＜小学生＞

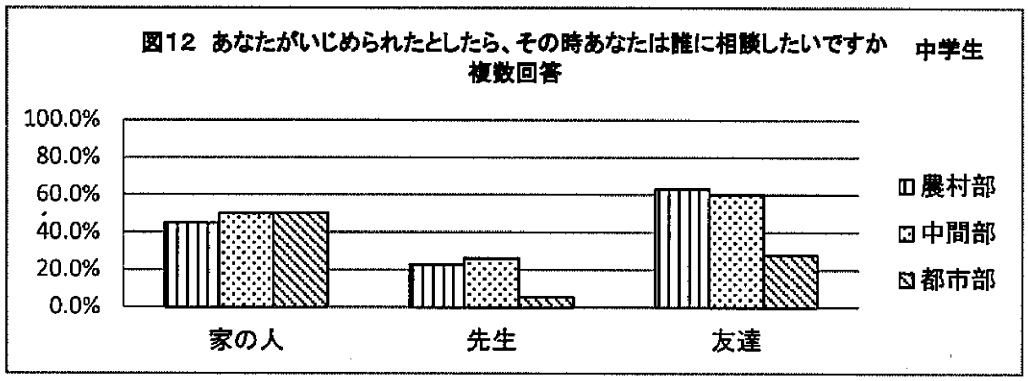
「いじめられた時あなたは誰に相談したいですか」という問いに対して、小学生の回答は図１１の通りである。「家の人」が都市部で８３％、農村部で７９％、中間部で７４％と高く、小学生の場合は家の人が多くなっている。「先生」については、農村部が４２％、中間部が４０％、都市部３２％であった。また「友達」については、中間部で４６％、農村部が３９％、都市部が３４％であった。この問いは複数回答であるが、小学生ということもあってか、もっとも身近な家の人（親）に相談するという子どもが多いことがあらためて分かった。

気になるのは学校の先生への相談がもっとあっていいと思ったが、こうした調査では、どこの調査においても、先生への相談はせいぜいこのぐらいの数字で、あまり高くはない。もちろんそれには子どもの側の心配や事情があるのであろう。それは、先生に相談した結果、問題がこじれ、複雑化することが、ややもすると起こることを、子ども達は先を読んで心配していることが分かっている。



＜中学生＞

中学生については、小学生とはかなり様相が違っている。図１２によると、相談相手は「友達」がもっとも多く、農村部６３％、中間部６０％となっている。不思議なことに都市部は２８％となっている。この都市部２８％をどう見るか、想像の域を出ないが、友達に相談したことで、いじめが難しい展開になることがしばしばあるので、それを恐れて躊躇したのではないかとも思われる。

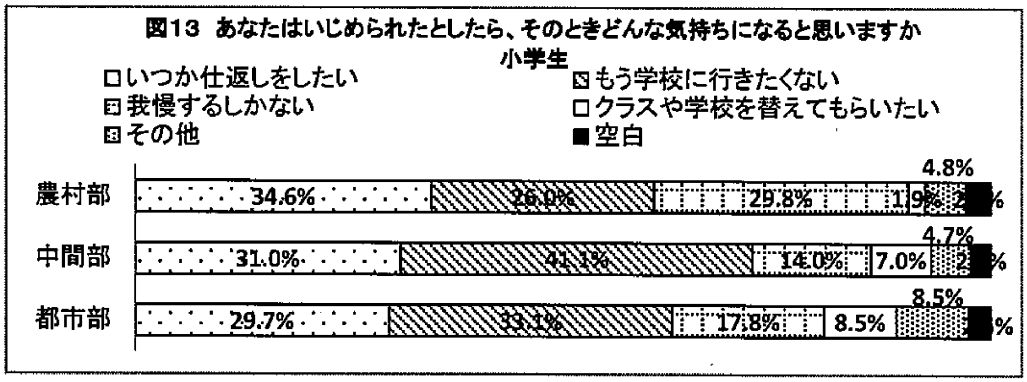


「家の人」については中間部、都市部共５０％、農村部４５％である。「先生」については、都市部が極端に低く５％、農村部、中間部でも２５％程で、小学生よりもかなり低くなっている。学校の先生が相談相手として低いのは全国的な調査でも同様であるが、先生に相談したことで、逆にいじめがエスカレートするのではないかという不安が、こうした結果になっているのかもしれない。それにしても先生が相談相手として信頼される努力こそ、今強く求められているように思われる。

③ いじめられたらどんな気持ちになるか

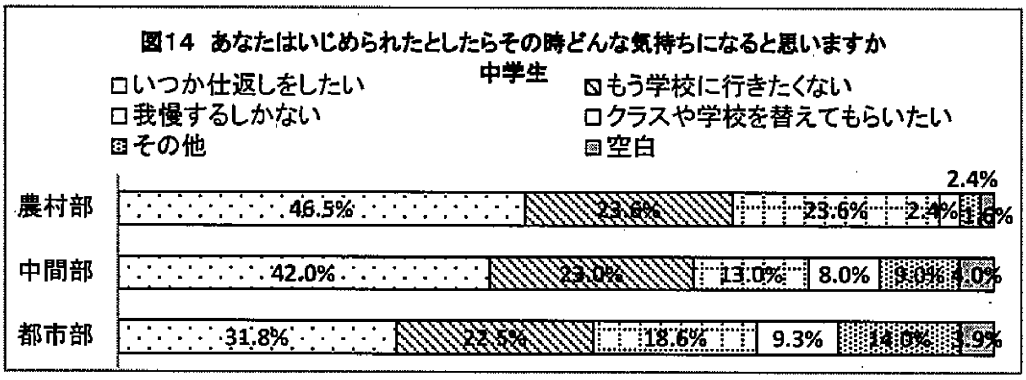
＜小学生＞

「いじめられた子どもの気持ちはどんな気持ちか」を４択で求めたところ、図１３のようになった。驚いたことに、積極的、攻撃的な行動として「いつか仕返しをしたい」がそれぞれ３０％以上となっている。登校を避けようとする「学校に行きたくない」が中間部４１％、都市部３３％、農村部２６％となっている。また問題なのは「我慢するしかない」という選択である。農村部３０％、都市部１８％、中間部１４％となっていて、２割から３割の子どもが我慢するという選択をしている。「仕返し」はむしろ問題を深刻化させることで問題だ。内に籠ってしまう「我慢」は孤独に追い込まれて最後は自分を閉ざして孤立することになり、これも危険である。



＜中学生＞

この問題を中学生で見てみると、図１４で、「いつか仕返しをしたい」が農村部４６％、中間部４２％、都市部３２％となって、かなりの生徒が攻撃的、反抗的選択をしている。これに対して「もう学校に行きたくない」という不登校的志向の選択はそれぞれ２０％以上となっている。また「我慢するしかない」は農村部が２３％、中間部、都市部が小学生並みの１３～１８％であって、この生徒こそ孤立して深刻な問題に移行しやすい。これまで全国でいじめ自殺をした子ども達の多くはこうした子ども達であることが分かっている。

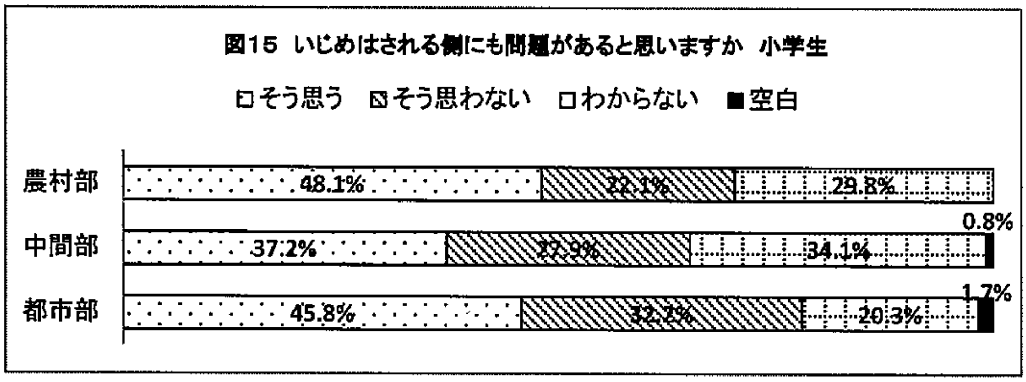


④　いじめられる側にも問題があるという子どもの見方

いじめ問題でよく話題になるテーマに「いじめはされる側にも問題がある」という子どもの側の見方がある。こうした見方に子ども達はどんな意識をもっているのであろうか。

＜小学生＞

小学生の意識からみていこう。図１５において「いじめはされる側にも問題があると思いますか」という問いに対して、「そう思う」は農村部が４８％、都市部４６％、中間部３７％となっていて、いじめの原因をいじめられる側においている小学生が意外と多い。「そうは思わない」は都市部３２％、中間部２７％、農村部が２２％となっていて「そう思う」よりもはるかに少ない。また「わからない」は農村部３０％、中間部３４％、都市部で２０％となっている。



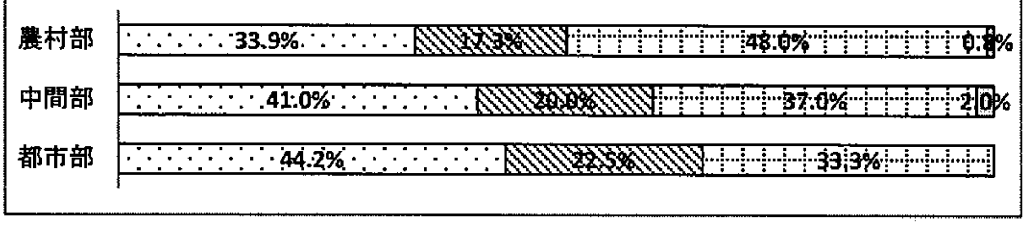
問題であるのは、３７％～４８％の小学生が、「いじめはいじめられる側にも問題

がある」という考えに立っているということである。相手によっていじめも許容されるという考えは、いじめを正当化している考えで、人権という観点に立てば問題になる意識である。いかなる事情があろうといじめという行為は許されないことを、しっかりと指導する必要がある。またおよそ三分の一が「わからない」と態度をあいまいにしているが、この選択にも疑問がある。

＜中学生＞

では中学生はどうであろうか。図１６の「される側にも問題がある」は「そう思う」は都市部では４４％、中間部は４１％、農村部では３４％となっている。「そうは思わない」については１７％～２２％で小学生よりも少ない。「分からない」については農村部４８％、中間部３７％、都市部３３％で極めて多い。

図16 いじめはされる側にも問題があると思いますか 中学生



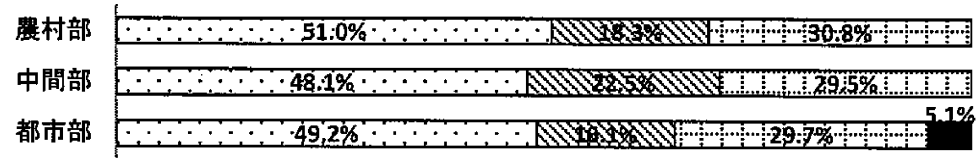
どちらにも判断できないということは、いじめに対する明確な原則をもっていないということからくる意識である。したがって、その場によって判断はどちらにも動くということであろう。「いじめという行為はいかなる理由があろうと許されない」という基本原則を中学生にも徹底しなければならない。この問題こそ徹底して中学生に教えていく必要があろう。これこそいじめへの指導の最大の課題と言ってよいであろう。

⑤ いじめで命を絶つということ

＜小学生＞

子どものいじめ自殺が、今も絶えない状況の中で、子ども達のいじめ自殺に関する思いを率直に質問してみた。まず小学生に対して、図１７で「いじめを受けても命を絶つことは絶対にないと思いますか」という問いに対して、それぞれの地域の回答を見ると、殆ど同じで、「そう思う」が５０％前後になっている。

図17 いじめを受けても自分は命を絶つことは絶対にないと思いますか 小学生

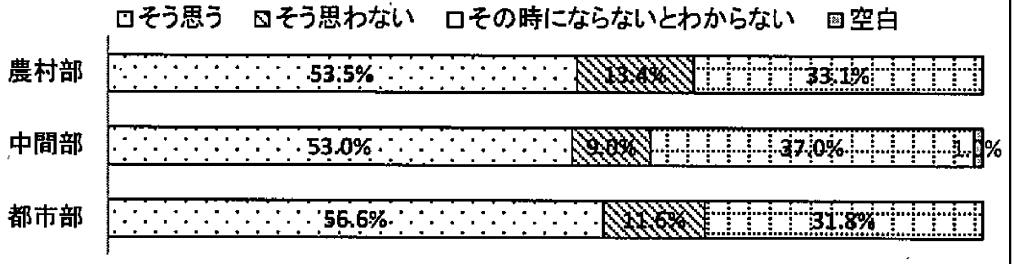


この数字は大人の目から見れば心配な数字のようにみえる。「そう思わない」という選択は１６％から２３％になっている。また「その時にならないとわからない」については、各地区およそ３０％前後あって、かなりの小学生が、多分状況次第で態度が変わるという含みをもって保留にしているのだと思われる。この保留を選択した小学生の心の奥に何があるのかはわからない。しかし心配な意識の一面である。

＜中学生＞

次に中学生のデータを見てみよう。図１８によると「命を絶つことは絶対にない」については三地区とも５３％～５７％となっている。この数字は小学生よりも若干多い。「そう思わない」については９％～１４％となっていて、小学生よりも少ない。「わからない」が３２％～３７％で小学生と大きな違いはない。

図18　いじめを受けても自分は命を絶つことは絶対にないと思いますか　中学生



小学生にしても、中学生にしても、こうした意識をどう読み解くか、慎重な読みをしなければならない。まず小学生も中学生も凡そ５０％は命を絶つことは絶対にないとしている。「その時にならないとわからない」については、命を絶つことを否定はしていない。このことは、もしかしたらいじめというものの深刻さを知っているのかもしれない。そうだとすれば、なおさら命の大切さ、命を守ることの重要さを学校もそして家庭も含めて、真剣に子どもに伝えていかなければならない。

⑥　いじめたくなる時

子ども達がいじめたくなるのはどのような心理状態の時であろうか。これまでいろいろと議論がなされてきたのであるが、そうした議論の中から４点に絞って子ども達の意識をとらえてみようとして、問いを発してみた。

＜小学生＞

小学生に対して「どんな時にいじめたくなるか」について聞いたところ、「なんとなくイライラしているとき」がもっとも多く、都市部が高く４７％、中間部、農村部が３０％強であり、これは言われるようにストレスであって、いじめの大きな背景と見てよい。次に多いのは「友達とうまくいかない時」で農村部３６％、中間部が２６％、都市部が２４％となっていて、仲間関係や仲間との葛藤が、いじめにつながっていることを示している。

３番目は、「学校でいやなことがあった時」で、中間部、農村部がおよそ２５％、

都市部が少なく１０％となっている。「家でいやなことがあったとき」は意外と少なく、どの地区でも５％以下で極めて少なかった。

＜中学生＞

では中学生についてはどうであろうか。「なんとなくイライラしているとき」が、農村部で３９％、都市部で３６％、中間部３３％で、全体としては中学生が小学生よりやや高い。次に多いのは、「友達とうまくいかない時」で都市部、農村部が同じで３５％、中間部が２４％となっていて、これも中学生が小学生よりもやや多い傾向にある。「学校でいやなことがあったとき」は１６％前後で小学生よりも少ない。「家でいやなことがあった時」は１０％以下で予想よりも少なくなっている。

総じて小・中学生にとって、共通していじめ心の生まれる背景が「イライラ」と「友達関係」が主であって、「学校でいやなことがあった時」もこれに次いでいる。このように見てくると、学校に課せられた課題は、仲間づくりや学級づくりに加え、子ども同士のストレス軽減や、対人関係のスキルを育てるプログラムなどが大切になってくるように思われる。

⑦ いじめを受けたとして子どもはいかなる行動をとるか

いじめを受けた時、子どもがいかなる行為を選択するかは、自分を守るという点からも、極めて重要な問題である。そこで、３大いじめといわれる「無視・仲間外れ」「しつこい悪口」「殴る・蹴る」を受けたと仮定して、子どもに三つの選択肢を用意した。その選択肢の内「相談」を選択するのか「我慢」を選択するのかの二つに限定して集計したところ、表７のような結果になった。

＜小学校＞

表７　いじめ行為をされた時の小学生の「相談」「我慢」の選択　　小学生（%）

対応／いじめ行為	都市部		中間部		農村部	
	相談	我慢	相談	我慢	相談	我慢
無視・仲間はずれ	43	20	37	30	43	25
しつこい悪口	33	19	33	22	38	16
殴る・蹴る	39	3	31	10	32	10

「相談」は、問題解決の重要な一つであること、また「我慢」は、自分で苦しみを背負い込むという意味で問題解決からは遠く、むしろ危険な選択肢であるということから、二つの選択肢に限定した。そこでこの二つの選択肢を見ると、都市部は三つのいじめ行為について「誰かに相談する」が４３％、３３％、３９％となっている。「我慢をする」は「殴る・蹴る」が肉体的苦痛ということもあってか、都市部は３％であるが、それ以外についてはおよそ２０％となっている。

中間部については「相談」が３１～３７％で全体の三分の一になっているのに、「我慢」は、「殴る・蹴る」について１０％であるが、他は２２～３０％となっている。

農村部においては「相談」が３２～４３％であるが、「我慢」については１０％～

２５％で他の地区よりはやや低くなっている。

＜中学生＞

では中学生についてはどうであろうか。小学生との対比で考えると、中学生らしさが見えてくる。

表８　いじめ行為に対する中学生の相談と我慢の選択　中学生(%)

対応 / いじめ行為	都市部		中間部		農村部	
	相談	我慢	相談	我慢	相談	我慢
無視・仲間はずれ	31	32	37	32	37	45
しつこい悪口	29	26	37	27	29	32
殴る・蹴る	22	11	22	11	20	15

表８によると、都市部においては、「相談」が小学生に比べて低く、「無視・仲間はずれ」「しつこい悪口」が３０％前後であり「殴る・蹴る」は２２％である。「我慢」については「仲間はずれ」が３２％「悪口」が２６％、「殴る・蹴る」は１１％となっていて、小学生に比べて、それぞれ１０％近く高くなっている。中間部においては都市部よりは「相談」の割合が高く、「蹴る・殴る」が２２％、その他は３７％である。「我慢」については、ほぼ都市部並みである。

農村部については、「相談」の割合は他地区とそれほどの違いはないが、「我慢」については「殴る・蹴る」以外は、他地区に比べてかなり高い。それだけに農村部の中学生は自分の苦しみを、自分で引き受ける傾向があり心配である。

以上小学校、中学校について総じて注目しておきたいことは、どの地区も「相談」がほぼ３０％台であり、「相談する」については消極的である。また「我慢」が２０％～３０％あり、この子ども達こそが、実はいじめの辛さを全て自分一人で引き受けて、自らを窮地に追い込んでしまう子どもである。

こうした子どもの意識を念頭において教師も親も「困ったら相談する」、「助けてと声を上げる」ことをこそ、子ども達に徹底することが大切である。また我慢しても決して解決にはつながらないこともしっかり教えていく必要があろう。

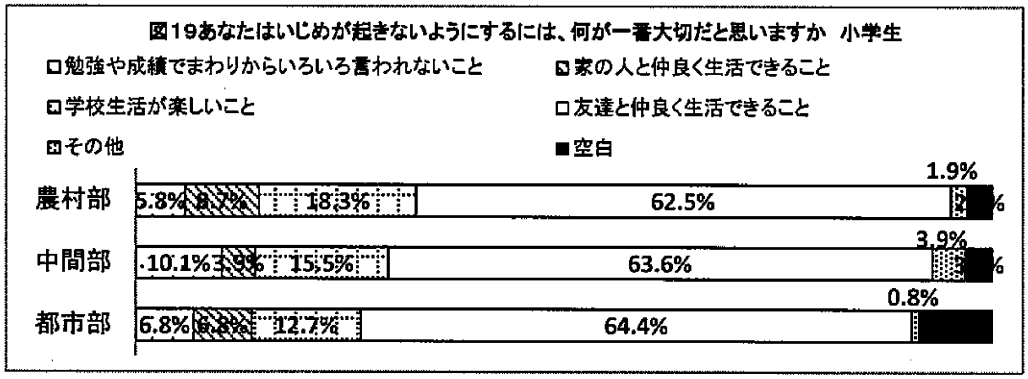
⑧　いじめが起きないために大切なこと

いじめが起きないためには何が一番大切なのであろうか。この問いを子ども達に聞いてみた。

＜小学生＞

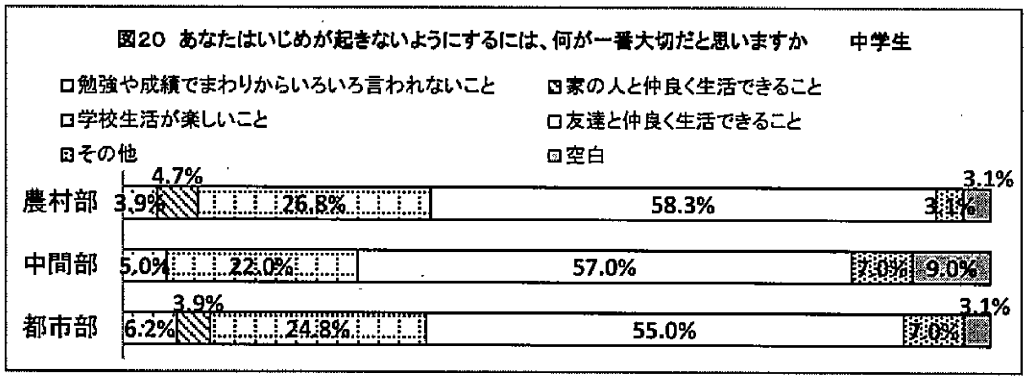
５つの選択肢を提示して回答を求めた。図１９によると「友達と仲良く生活すること」が各地区とも６４％前後で、当たり前といえばそうであるが、これが最も高くなっている。このことは、いじめが起こる背景が友達関係に多くあることを示しているとも思われる。次に多いのが「学校生活が楽しいこと」で１３％から１８％となっている。あとは中間部が「勉強や成績でまわりからいろいろ言われないこと」が１０％ほどあるが、問題は、「学校生活が安定して楽しいこと」が、いじめが起き

ない大切なことであるということが、小学生が考えるいじめ対策の基本のようである。



＜中学生＞

では中学生について、小学生と同じ質問をしたところ、図２０を見ると、小学生と同じく、地区の差はほとんどなく「友達と仲良く生活できること」がもっとも多く、５５～５８％となっている。次に多いのは、これも小学生と同じく「学校生活が楽しいこと」で２２～２５％となっている。この数値は小学生よりは１０％ほど高く、中学生にとっても、学校生活が楽しいことが、いじめが起きないための大切な条件ということであるようだ。「勉強や成績についていろいろ言われないこと」という選択は５％前後で意外と低かった。



５．子どもにとってのストレスの背景

子ども達がかなり高いストレス状態にあることは、既に明らかにしてきたが、このストレスは子どもにとって、どこからきているのかを５つの選択肢で聞いたところ以下のような回答が得られた。

＜小学生＞

小学生については最も高い項目は「勉強や宿題や成績が思うようにいかないこと」で、それぞれ４２％～４５％となっている。次は「友達関係がうまくいかないこと」で２５～２７％となっている。三番目は地区によって多少の違いはあるが、「家の人とうまくいかないこと」で都市部、農村部が１０％程になっている。「先生との関係がうまくいかないこと」も１０％ほどになっている。やはり小学生にとっては、「勉

強」「友達関係」が大きなストレスの背景になっているようである。

＜中学生＞

では中学生にとってはどうであろうか。やはり小学校と同じで「勉強や宿題や成績が思うようにいかないこと」が一番高く、農村部３９％、都市部３５％、中間部が３１％となっているが、この数値は小学生よりはやや低い。次は、これも小学生と同じで「友達関係がうまくいかないこと」で、都市部は低くて２３％であるが、中間部、農村部は３３％となっている。三番目は「部活がうまくいかないこと」で各地区１２％ほどとなっていて、これは小学生とは違った点である。「家庭の問題」や「先生の問題」はさして大きなストレスの背景にはなっていないようである。

以上

Ⅲ.　本調査のまとめと提言

本調査は、不登校やいじめ問題などをはじめ、家庭や学校生活などの問題を含めて、総合的に小学生・中学生の意識を捉える調査として行ったものである。調査としては、やや総花的な調査になったが、現時点における子ども達の意識の全容が明らかになった。以下本調査の概要のまとめと、そこから引き出される提言を整理しておきたい。

（1）　子ども達の家庭生活は全体として平穏で安定的

子どもと家族とのコミュニケーションは小学生も中学生も活発であり、よく話し、よく聞く関係が見られた。また子どもから見て、家族が自分たちをわかってくれていると、多くの子どもが回答し、親や家族の子ども理解の度合いも進んでいるように思われる。しかし、約２０％程の中学生が、「理解してくれていない」と回答している。親・家族が自らの一方的立場で子どもに対応するのではなく、子どもの気持ちや心を理解することが大切であるという点を指摘しておきたい。

（2）　親や家族に愛されて育っている子どもが９０％

今回の調査で、「あなたは家の人に大事に育てられたと思っていますか」を質問したところ、９０％以上の小学生・中学生が大事に育てられたと回答し、安定した育ちをしてきたことが分かった。いま親や家族の虐待的育ちが問題視されている中で、この調査結果は親の子育てが安定的であったことを示している。

（3）　高いストレスを抱えた子ども達

今回の調査のポイントの一つは小学生や中学生のストレスの現状を把握することであった。６つのストレス反応から子ども達のストレスの現状を捉えた。

その結果、それぞれの項目において、小学生も中学生も極めて高いストレス状況にあることがわかった。

今回の調査結果と平成１２年調査結果とを比較したところ、歴然とした差が見られた。それは現代の子ども達のストレスがますます広がり、深まっているという実態が明らかになったということである。現代社会がストレス社会とまで言われる中で、子ども達も同様に高いストレス状況におかれているという実態が明確になった。

そこでこうした子どものストレスへの対応で大切なことは、①子ども達に、必要以上に、学習や成績や成果などで、プレッシャーをかけないこと。②子ども達にストレスを上手にコーピングする仕方、すなわちそれは、音楽であったり、好きな趣味に没頭したり、運動で体をほぐしたり、興味のある体験的活動をしたり、対人関係などのソーシャルスキルを高めたりするプログラムなどを導入することである。かくして、ストレス軽減に学校も家庭も努めなければならない。

（4）　登校に意欲を持てない子どもが２０％

今回の調査のもう一つのポイントは子ども達が、日々学校へ登校していること

に関する率直な思いを把握することであった。不登校の子どもの数が減少しない中で、子どもは日々登校していることについてどのような思いを持っているのか、この点について子どもの本音を捉えてみようと考えたわけである。

この点に関して小学生においては、「あまり行きたくない」は都市部と中間部が２０％以上、農村部が１５％程となった。「ぜんぜん行きたくない」については中間部が低いものの都市部、農村部で１０％程の子どもが回答し、登校への意欲が低い様子が伺われた。

中学生についても同様で、「あまり行きたくない」が都市部で２４％、農村部、中間部で１７％前後になっている。「ぜんぜん行きたくない」は小学生よりは低いものの、中間部、都市部が６％前後、農村部は２％ほどになっている。こうした子ども達はもしかしたら不登校予備軍なのかもしれない。

こうした今回の結果を平成１２年調査結果と比べてみたところ、今回の調査の方がはるかに、学校に行きたくない子が減少していることが分かった。もちろんそれには、学校をはじめとして関係機関の様々な努力があってのことと思われる。

ではこうした結果から引き出される課題は何か、それは①登校渋りの子どもの早期発見と早期支援である。そのためには、学校と家族の連携が不可欠である。②子ども達に、学ぶ楽しさを実感できる学習活動を工夫し、つくりだすことである。③子ども同士で学び合う、支え合う人間関係づくりや学級づくりも一層丁寧にすすめることなどが大切な課題であろう。

（５）　子どもにとっての学校生活はおおむね適応的

子ども達の総合的な学校生活への適応は、全体として安定していて、学校での友達関係、学校における先生との関係も適応的であった。しかし勉強については３０％～４０％の中学生が「うまくいっていない」と回答し、こうした中学生達への丁寧な学習支援が学校にも家庭にも求められている。

（６）　学校生活全体の満足度は、小学生も中学生も高く８０％

全体として子ども達の学校生活への満足度は高い。しかし小学生の中にも、中学生の中にも、それぞれ２０％近くの子どもが満足していないと回答していた。その背景は本調査ではわからなかったが、それは、子どもによっては勉強であったり、友達関係であったり、先生との関係であったり、部活であったり、いろいろであろう。しかし、グローバルなこの種の調査ではこの程度の数値は、よく見られる結果であって、深刻に捉えるほどのものではないように思われる。

（７）　今回の調査のメインのテーマはいじめ問題

①　いじめられても何もできない子ども１０％の存在に注目

いじめられても何もできない小学生が６％～８％程存在する。中学生では１０％～１１％程存在する。この子ども達はいじめに対して無力な子ども達であって、いじめの標的にされやすい子どもでもある。「止めて」と声を上げることも

できない。もちろん親にも先生にも、相談しない子ども達であり、苦しみを一人背負い込む子どもである。それだけに指導する側にとって大切なことは、周りの大人が早期にこうした子どもを発見し、支援の手を差し伸べることである。

② いじめられた時の相談相手は、小学生は親・中学生は友達

いじめられた時の相談相手は誰かを聞いたところ、小学生の場合は、家の人が８０％前後、２番目が友達で４０％弱となっている。中学生の場合は友達が６０％以上で、２番目が家の人で４０％であった。中学生と小学生との違いがはっきりと出た。ここで問題となるのは、身近な存在としての「学校の先生」が相談相手として少ないということである。この点については、子どもの側に言い分があるようだ。すなわち「チクったと思われるから」「相談したことで問題がこじれるから」などいろいろと子どもの言い分がある。

そこで大切なことは、先生が相談できる相手である、という子どもの側の先生への信頼を取り付ける努力を、先生が日常的にしていくことであろう。また、先生以外のスクールカウンセラーなどへの相談もできるように相談の窓口を広げておく必要があろう。

③ いじめられたら「学校に行きたくない」「我慢する」子が多い

「いじめられた時どんな気持ちになるか」という問いに対して「学校にいきたくない」が小学生で平均３４％、中学生が平均で２３％にもなっている。これまでの多くの不登校研究で、いじめが不登校の引き金になっている事例が多く報告されてきている。

この質問の選択肢の中で、「我慢するしかない」という回答が小学生も中学生も高い。小学生では地区平均で２０．５％、中学生では地区平均で１８．４％であった。この「我慢する」は小学生も中学生も農村部の回答が高かった。「我慢する」という子どもは、いじめの苦しみを自分一人で受け止め、孤立していく子どもである。そうだとすれば、子どもに対して、悩みや苦しみを相談することが解決に向かうのだということを日頃子どもに徹底して教えておくことであろう。

④ いじめは「される側にも問題があるという」子どもの意識

いじめは紛れもなく相手の人権を傷つける行為である。ところが子どもはこうした人権という観点に立った見方をどれほどもっているであろうか。この点を捉えるために、「いじめはされる側にも問題がありますか」という問いをダイレクトに質問してみた。この質問に対して、予想を超える意外な回答が多く寄せられた。小学生は「いじめられる側にも問題がある」に対して「そう思う」は地区平均で４３．７％となった。中学生については、「そう思う」が３９．７％となった。「そうは思わない」は小学生で２２％～３２％止まり、中学生では１７～２２％止まりとなっている。年齢が上がるにつれて、いじめられる側の人権を考える力が付いてきていることは、数値の上からも確かであるが、まだいじめという

行為を、人権の問題として、十分には捉えきれていないということが分かる。

したがって教育者や親に求められる大切なことは、いじめという行為は相手がどうであろうと、絶対にしてはならないという「人権」の視点に立って、きちんと子ども達に教えていかなければならないということである。

⑤ 「いじめで命を絶つことは絶対にない」という子どもが５０％

いじめ自殺が後を絶たない現状にあって、子どもはいじめ自殺をどう捉えているのかについて、率直に問を掛けたところ、以下のような結果が得られた。小学生については、「命を絶つことは絶対にない」は地区平均４９．４％、中学生については５４．３％であった。「そうは思わない」は小学生で１６％～２２％、中学生で９％～１３％となっている。しかも「わからない」が小学生も中学生も３０％前後いる。

こうした子どもたちの回答結果から、年齢が上がるにつれて、死の意味を理解し、自死を否定するようになってきていることが分かるが、確固たる命の大切さという意識については、まだまだ身についてはいないことが分かる。また、この数値についてどうしても触れておきたいことは、いじめという行為の怖さを子どもなりに分かっているが故に、「そうは思わない」または「わからない」の数値に反映されているとも思われる。

それにしても、子どもたちに対していじめという行為に関して、命の大切さという観点から十分な教育を、より丁寧にしていくとともに、いじめが死にもつながり得るという怖さを、一層徹底して指導する必要がある。

⑥ いじめたくなる心理は「イライラ」と「仲間とのトラブル」

子ども達はどのような心理状態の時に「いじめたくなるのか」について質問したところ、「なんとなくイライラしているとき」が小学生も中学生も一番多かった。二番目に多かったのは「友達関係がうまくいかないとき」、そして三番目は「学校でいやなことがあったとき」であった。やはり学校生活における友達関係や教師との関係などが安定的で、学ぶ喜びにあふれて充実感があり、自尊感情が尊重される環境であれば、いじめ心は生まれることはないであろう。

Ⅳ　引用・参考文献

1．　兵庫県「青少年の心の問題」ネットワーク推進会議　「いじめ問題の解決や予防をめざして―中学生のストレスといじめ問題の関係をさぐる―」平成１１年３月

2．　兵庫県「青少年の心の問題」ネットワーク推進会議　「子どものストレス―その実態と対処―」　平成１２年３月

3．　ひょうごユースケアネット推進会議　「ひきこもりＱ＆Ａ―支援マニュアル―」平成１９年３月

4．　兵庫県立神出学園　「よみがえる子ども達―子ども達はこうして元気になった―」創立２０周年記念出版　平成２５年１１月

Ⅴ．家庭生活や学校生活についての調査

ひょうごユースケアネット推進会議

この調査は児童や生徒の皆さんが安心して家庭や学校で生活が送ることができるように行うものです。**あなたの考えに一番合う番号に○をつけてください。**

この質問の中に家の人にかんする質問があります。家の人がおられない場合は、かわって育ててくれた人を思い出して答えてください。どうしても答えられない場合は答えなくてもいいです。

> この調査票に答えたことについて、あなたの迷惑になることは決してありません。また、名前を書く必要もありませんので、安心してありのままに答えてください。

1．学年　　（　　）年

2．性別（○で囲んで下さい）　男子　・　女子

（1）普段家の人とよく話しますか

1．よく話す　　2．時々話す

3．あまり話さない　　4．ほとんど話さない

（2）家の人はあなたのことをわかってくれていると思いますか

1．よくわかってくれている

2．まあわかってくれている

3．あまりわかってくれていない

4．ほとんどわかってくれていない

（3）家の人はあなたの話をよく聞いてくれますか

1．よく聞いてくれる

2．まあ聞いてくれる

3．あまり聞いてくれない

4．ほとんど聞いてくれない

（4）あなたはこれまで家の人に大事に育てられたと思いますか

1．とても大事に育ててくれた

2．まあ大事に育ててくれた

3．あまり大事に育ててくれなかった

4．ほとんど大事に育ててくれなかった

（5）あなたは今、家の人に大事に育てられていると思いますか

1．とても大事に育ててくれている

2．まあ大事に育ててくれている

3．あまり大事に育ててくれていない

4．ほとんど大事に育ててくれていない

（6）あなたは普段イライラすることがありますか

1．よくある　　2．時々ある

3．あまりない　　4．ほとんどない

（7）あなたはふきげんでおこりっぽくなることがありますか

1．よくある　　2．時々ある

3．あまりない　　4．ほとんどない

（8）あなたは体がだるくなることがありますか

1．よくある　　2．時々ある

3．あまりない　　4．ほとんどない

（9）あなたはつかれやすくなることがありますか

1．よくある　　2．時々ある

3．あまりない　　4．ほとんどない

（10）あなたはなにもやる気がしないことがありますか

1．よくある　　2．時々ある

3．あまりない　　4．ほとんどない

（11）あなたはだれかに（何かに）怒りをぶつけたくなることがありますか

1．よくある　　2．時々ある

3．あまりない　　4．ほとんどない

（12）あなたは毎日登校することについてどんな気持ちでいますか

1．楽しい　　2．まあ楽しい

3．あまり楽しくない　　4．楽しくない

（13）あなたはいつもどのように思いながら学校に行っていますか

1．いつも行きたいと思う

2．だいたい行きたいと思う

3．あまり行きたくないと思う

4．ぜんぜん行きたくないと思う

（14）あなたは学校で友達との関係がうまくいっていますか

1．うまくいっている

2．だいたいうまくいっている

3．あまりうまくいっていない

4．うまくいっていない

（15）あなたは学校で先生との関係がうまくいっていますか

1．うまくいっている

2．だいたいうまくいっている

3．あまりうまくいっていない

4．うまくいっていない

（16）あなたは学校で勉強がうまくいっていますか

1．うまくいっている
2．だいたいうまくいっている
3．あまりうまくいっていない
4．うまくいっていない

（１７）あなたは勉強することが楽しいですか
1．楽しい
2．まあ楽しい
3．あまり楽しくない
4．楽しくない

（１８）あなたは学校生活に満足していますか
1．満足している
2．まあ満足している
3．あまり満足していない
4．満足していない

（１９）あなたの周りでいじめがあったとしたら、その時あなたはどうしますか
1．何もできない
2．だれかに相談する
3．いじめている人に注意する
4．わからない

（２０）あなたがいじめられたとしたらその時あなたはどうしますか
1．何もできない
2．だれかに相談する
3．相手にやめてという
4．わからない

（２１）あなたがいじめられたとしたら、その時あなたは誰に相談したいですか。あてはまるものすべてに○をつけてください
1．家の人
2．先生
3．友達
4．その他（　　）

（２２）あなたはいじめられたとしたら、その時どんな気持ちになると思いますか
1．いつか仕返しをしたい
2．もう学校に行きたくない
3．我慢するしかない
4．クラスや学校を替えてもらいたい
5．その他（　　）

（２３）時と場合によっては、いじめはあってもいいと思いますか
1．そう思う
2．そう思わない
3．わからない

（２４）いじめはされる側にも問題があると思いますか
1．そう思う
2．そう思わない
3．わからない

（２５）いじめを受けても自分は命をたつことは絶対にないと思いますか
1．そう思う
2．そう思わない
3．その時にならないとわからない

（２６）どんな時にいじめたくなると思いますか
1．なんとなくイライラしているとき
2．学校でいやなことがあったとき
3．家でいやなことがあったとき
4．友達とうまくいかないとき

（２７）もし、あなたが仲間はずれにされたり、みんなから無視されたりしたら、あなたはどうしますか
1．理由を聞く
2．だれかに相談する
3．だまって自分で我慢する

（２８）もし、あなたがしつこく悪口をいわれたら、あなたはどうしますか
1．やめてほしいという
2．だれかに相談する
3．我慢する

（２９）もしあなたが、なぐられたりけられたりしたら、あなたはどうしますか
1．やり返す
2．逃げる
3．だれかに相談する
4．じっと我慢する

（３０）あなたはいじめが起きないようにするには、何が一番大切だと思いますか
1．勉強や成績でまわりからいろいろ言われないこと
2．家の人と仲良く生活できること
3．学校生活が楽しいこと
4．友達と仲良く生活できること
5．その他（　　）

これで終わりです。たくさんの質問に答えていただき、ありがとうございました。もう一度、記入もれがないか確認をして、このアンケートを封筒に入れて、しっかり封をして提出してください。

編集・執筆等関係者

監　　修　　小 林　　剛　　ひょうごユースケアネット推進会議座長
（兵庫県立神出学園長）

編集・執筆　「子どもの生活といじめ・不登校等調査研究会」（五十音順）
郡　　龍 仁　　県立但馬やまびこの郷　指導主事
竹中　久美子　　県立清水が丘学園　治療課課長補佐
秦　　良 和　　県立神出学園　主任専門指導員
福成　真規子　　県中央こども家庭センター　児童心理司
事 務 局　竹 村 英 樹　　県企画県民部県民文化局青少年課長
星 野 美 佳　　県企画県民部県民文化局青少年課副課長
杉浦　裕加里　　県企画県民部県民文化局青少年課企画調整係主査
坂 本 好 也　　公益財団法人兵庫県青少年本部業務執行理事兼事務局長
谷 川 厚 子　　公益財団法人兵庫県青少年本部主幹（企画・情報担当）

集計・作表・調査研究補佐
荻 野 晴 加　　県立神出学園　調査研究員

子どもの生活といじめ・不登校等に関する意識調査
平成２６年３月

調査・編集　ひょうごユースケアネット推進会議
子どもの生活といじめ・不登校等調査研究会
（事務局）兵庫県企画県民部県民文化局青少年課
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目 10-1
Tel(078)341-7711　Fax(078)362-3957

発　　行　公益財団法人兵庫県青少年本部
〒650-0011　神戸市中央区下山手通４丁目 16-3
Tel(078)891-7410　Fax(078)891-7418